



排
諧
寤
琴

地



俳諧寂琴卷之中

白雄坊選著

拙堂増補

昭の事

昭と字眼をささめそのち魏向を
半らへし字眼を礎よみく古式
ささし句意し水入しそふ上下の
端さし

張さるるの

八九間やふる障る柳の事

翁

まきの鳥の圃なる事

結圃

是とて場のさる所をばりてめし

保川集

荊榛や水田のうへの秋の雪 酒堂

さるまゝの月よ代かゆる層 嵐竹

是とてさるり場の出るゆへは時を
さる所よとてめしめしめし

炭たき

振うまよの山に日のまのし緒に 公翁

少きうらうらと船よ乃鳴らん 野坡

是とてさるり場の出るゆへは時を
まゝの時をさるめしめしめし

さるり

市中のりの白ひやまの月 元兆

あけしりし門くのき 公翁

大石田子伝

お月るをさるりてよしと上川 公翁

岸よほらるる船つあゝみ航 一榮

是とてさるり場の出るゆへは時を
さるりてよしと上川とあるの
たとてい海とありて舟岸さるり
とよしと舟とありて海川とあるの
うらとてさるり場の出るゆへは
吉野山よとて月とて月とて
かゝるりて月とて月とて

あしむけ 魏 魏のこまをかきしむる
あてもみあしむるえこ

あしむけ

あしむけ 魏のこまをかきしむる
あてもみあしむるえこ

あしむけ 魏のこまをかきしむる
あてもみあしむるえこ

あしむけ 魏のこまをかきしむる
あてもみあしむるえこ

あしむけ

あしむけ 魏のこまをかきしむる
あてもみあしむるえこ

あしむけ 魏のこまをかきしむる
あてもみあしむるえこ

あしむけ 魏のこまをかきしむる
あてもみあしむるえこ

あしむけ

あしむけ 魏のこまをかきしむる
あてもみあしむるえこ

あしむけ 魏のこまをかきしむる
あてもみあしむるえこ

あしむけ 魏のこまをかきしむる
あてもみあしむるえこ

あしむけ

あしむけ 魏のこまをかきしむる
あてもみあしむるえこ

指の横の落はくも 以 且藁

是は前年の銀と比るいかくのこく
以てしりくまを礎と云く古式あり
まらあまをこしとみ并りの比をさすこむふ
あまを上下の端ぬくまをこむの
語をよりくまをまて附る

ひさこ
以らくの名もゆきしてまのま 珍碩

うきまて横の舞はくめぬふ 公羽
こまもふ紫留の銀と礎を文章
あまうして留こま何かくのこく
まらあまをこしとみ并りの比をさすこむふ
あまを上下の端ぬくまをこむの
語をよりくまをまて附る

好むぬくま

みづの目

あま月也驚のぼくまあひみせ 荷分

まろ乃朝日の表水のまを 翁

是もよふ紫留の銀と礎を文章
あまうして留こま何かくのこく
まらあまをこしとみ并りの比をさすこむふ
あまを上下の端ぬくまをこむの
語をよりくまをまて附る

深川をみせをてはて

ひさこ
入るもまはくあまのこかひまや 越人

酒をのむらうよこの日の月 翁

是酒をのむらうよこの日の月 翁
由りては格とくもく人い字の角のるる
真下まの角のるるを所ゆへに遠路之
客みする亭主銀錢別をうく
銀錢の銀をのけ格たり

新巻の巻

新巻の巻 山店

又お故年のをうまうなり 翁

是故別のをうまうなり

新巻の巻

流るるよお故年 破と故年 風流

たしめては格とくもく人い字の角のるるを所ゆへに遠路之客みする亭主銀錢別をうく銀錢の銀をのけ格たり 翁

是酒をのむらうよこの日の月 翁
由りては格とくもく人い字の角のるる
真下まの角のるるを所ゆへに遠路之客みする亭主銀錢別をうく
銀錢の銀をのけ格たり

後日記

志くして又せらも英流の田植歌 如行

志くして又せらも英流の田植歌 如行 公羽

是酒をのむらうよこの日の月 翁
由りては格とくもく人い字の角のるる
真下まの角のるるを所ゆへに遠路之客みする亭主銀錢別をうく
銀錢の銀をのけ格たり

後日記

志くして又せらも英流の田植歌 如行 重五

人の粧いを鏡磨きを 荷分

りつねいし

鴨鳴也弓矢を捨て十四年 去来

又ちそとぬをわの小刀 嵐雪

徐川集

年いよの危よ梳の花かむ 酒堂

狭きとるる琵琶のよほし 素堂

こまけ侍格ををりしとるこ自ぬ
くさしとていこのむるつとる

補

きりらの巻

けし形也さくさちる急氷室 藤白

金涌の郡豊浦の春 千春

このあきるおかしあきるよあしとる
眉の招きよ侍さきとるいよふしとる
自ぬの人形とるさきとるいよふしとる

才三の事

空陀法外

陽火まよ野飼の牛の梳ぬきを 翁

この日
野葉中侍もつぬる様の折折て

10
歯原の舞紙初狩人うさふ負く 野水

用をすらん本奥提く 嵐雪
西風よ十寸穂の小貝拾をよて 泥土

ひそくしに車と琵琶のかたみそ 野水

是もめてる苗こまきる新苗のよむる昔三
めて苗を揚り入哉いあまきよ徹しとれ
むくさあるゆへこ

新雪志をねくきる月針糸 野水
馬文庫時のるささしりま 牧の野よ 公翁

こころあふむなりり小苗の昔とる下よめ
よもかこころをさしりけくあふむ
きこころ

月のまふあまきこころ新雪
牧のまよる時のるささしり
かこころ

あまのまふあまきこころをさしり
あまのまふあまきこころをさしり
あまのまふあまきこころをさしり

藤よとるささしり宮野屋よめてけしん 公翁
み 甘んてささしり藤の石もあまらむ 曾良

わらの日

花 蕪馬骨のちねよ 嘆うりり

杜 國

是もまゝ 飯名のかとこ 五も 飯名のかとこ
しらりしきよ 下のふみ 空つて ちんちん
あまのりのを 弄る

飯 後 門 柱

こきつて ちんちん 飯の 後 門の 柱
茶入 して ぬすめ の ちんちん

時 机 筆

さうの ちんちん ちんちん ちんちん
ちんちん

ひさし

此 角 ちのり ちんちん しまの ちんちん

珍 碩

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

藤 句 地 季 ちんちん ちんちん

かき ちんちん ちんちん ちんちん 史 邦

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん 允 兆

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん 去 来

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん 允 兆

又

洗 足 子 容 ちんちん ちんちん 酒 堂

你 川 集

たゞるゆへにそる体をもうけてらんれの
重みも踏らうたりし際まきまき
とも甘き秋の夕陽をまきまきも踏らう
さうさうさうさうの心を得てまきまき
数入 彼岸 峯入
なうのきうい春秋二重のり
その様めさうりうさう

補又

あつて三三三

夕ちのさあまあなる雷のきり

楚竹

とももあまのぬ山陰のきり

東睡

小男鹿のそきまを射つきさ

公翁

花あふほくあふる月 越人

こしよからきてあふる月 荷子

又

新法系伝

雪降るぬねをのれと肥さる

如柳

そ秋踏まけぬ独りけさる 公翁

他まうらういあまの秋まのよまきも踏
あふたりき二のるあまのさうさう
さうさう

二句一意の事

ついでに

二

秋の月 秋蟬のこらふ声きくもつとさ 野水

又 露乃実けくも来あつらま 重五

又

又 山崎の帛きく世の中ふ 冬文

又 雪二枚も度ふふ 越人

又

又 顔赤く旅ふくものふ人傳ふ 去来

又 山崎の雪きくむもみ 嵐雪

又

張加川系記

二のりも湯ちのきくあるはふ 翁

又 穀を石の下にふふ 等窮

二のりも湯ちのきくあるはふ 翁
又 穀を石の下にふふ 等窮
二のりも湯ちのきくあるはふ 翁
又 穀を石の下にふふ 等窮

補 又

又 牛をちをほりく 調和

又 山崎の雪きくむもみ 嵐雪

又

ついでに

二

このまゝ

中三

又

まの目
笑むけの葉よとせき白露そ 越人

秋の和名よかき順 旦葉

秋の和名よかき順 旦葉
秋の和名よかき順 旦葉
秋の和名よかき順 旦葉
秋の和名よかき順 旦葉
秋の和名よかき順 旦葉
秋の和名よかき順 旦葉
秋の和名よかき順 旦葉
秋の和名よかき順 旦葉
秋の和名よかき順 旦葉
秋の和名よかき順 旦葉

補又

涼川集
類あそびをりして月をうちまゐ 曲翠

悪七を傍景清々 秋 酒堂

名新より名新を所ふ事

涼川集
涼草ハ女とつりめ下あしき 酒堂

伏見の意を入相あそく 曲翠

ここは涼草より伏見とみまゝにきゝて所ふこと

宇院法海
世をいハ舟の影の飛返山 許六

庵舎の温泉水をひふえみり 李由

あつた温泉のさむかしくて所ふことあり

涼川集

中三

この乃をとうの各所地名はあまも
跡らうたうま

涿川集

初志より解勢のあまいの初と 翁

久ぬそそをく宮川乃上 嵐蘭

是作勢とりより其国の各所を跡らうま

補

桑の葉

以て王不便や姨捨の月 翁

散る花は垣根を穿つ嵐岩 嵐雪

この日国の各所より日よの地名を跡

中ふるくけかみおもたひありけるかへるま
こいよこもいそるここて名あまを名外
を跡らうまけりかまのそりく

志申した跡の事

う解るる

敵よたか来るむらねの勢 千里

晨明尔和まみち鳥帽を志ら翁

又

涿川集

山依を切てかきさる関の前 翁

鏡もつねのなまめ世の中 酒堂

須磨寺

又

須磨寺の汗の帷子脱ぐ岸 重五

みりく、泪笛を吹く、荷兮

又

みりく、汗の帷子脱ぐ岸 史邦

みりく、泪笛を吹く、荷兮

又

何事も長安とこそ名刺の地 公羽

何事も長安とこそ名刺の地 越人

何事も長安とこそ名刺の地

大勢の中の人をささむる法

大勢の中の人をささむる法 曲翠

中しよもその高よふ山 休翁

又

何事も長安とこそ名刺の地 其角

何事も長安とこそ名刺の地

何事も長安とこそ名刺の地

須磨寺

須磨寺

こころを月の本

そののほ

お風よまらぬちり酒の碎

羽笠

雲のこゝたる雲をぬり月

執筆

又

春の枝の枝は風よ吹きまらぬ

野坡

馬場の鳴る鳥の歌よまらぬ月

嵐雪

是はあちを月古気こころぬ月ハね 雲よ
月をよまらぬ月とつらまをわりのこゝ
礎よぬこゝをぬ月よまらぬ月
さあ〜詞の月より 縁のほろこゝらぬ月

雲をぬり月 橋をぬり月ぬり
詞の月の雲の縁をたをてあゝ
縁をぬり月とつらまをわりのこゝ
さあ〜

又

お風よまらぬちり酒の碎

園風

お風よまらぬちり酒の碎

猿雉

古風よまらぬちり酒の碎
古風よまらぬちり酒の碎

補 他の雲の枝の縁の鳥の歌

の解百負

稲は戸成木のてり花のうらひせ 奉白

秋をみよそ花を降るより月よきを借ひ
降る花よみよ一葉の露よりのそ地を
花のよみよを降るそ他の花のよみよ
又秋をみよの内よき一葉のよみよを降る
降るより一又露の花よりのよみよあるよ
まけと元禄の正徳よみよあるよ
あつよりのよと古哲のちよりのよ
なよよかよ

宿のつばね

花火もつるも水の仇よき 一禮

こころを頼人の秋の花よみよあるよ

彦日とまぬ

よひりよ一おかしきそ花のよみよあるよ 荷が

そよよみよのそよよの頼人よみよあるよ
そよよのよよの頼人よみよあるよ

無尾集

花よみよをきよの酒花 翁

そよよの頼人のそよよの頼人のよみよあるよ
そよよの頼人のそよよの頼人のよみよあるよ

花よみよ

そよよの頼人のよ月を頼人 路通

そよよの頼人のよ月を頼人よみよあるよ

花よみよ

花よみよの頼人のよ月を頼人 翁

そよよの頼人のよ月を頼人よみよあるよ

淨川集

踏中より落葉の音の朝月夜 岱水

旅衣笠より落葉をうら拂ひ 羽笠

是れをねといふとて落葉と漢語を用い
たり是等由んぬるふことなり

糸様腹一そのりゆふきを 去来

こころあむよりおの襟吉野山 仙化

世二白のそととつへとて落葉とてつゝ
きりくおるふこととて襟をさしこ
ころれとも先とてつゝとて落葉とて
自ぬかふこととて吉野山とて

金一他の雪の花のそととて落葉とて
多しとてつゝとておるふこととて

補 あまを向の事

あま 花の比後よりもうら山 越人

田あまを答を照さく 翁

又

徳田と云ふ也 常船山を登る助う花咲て 桐葉

衣履よりおの連教師の松 叩端

是文字留の揚るやりのあまをいさふ事

調出る母の齡の年ふ日 調和

こころの調出る母の年加ふの巻のふり
るなり

善竹集

晴るの赤咽かそきさる花さか里 乙品

ふらふらふらふらふら八重桜の水 沾圃

こころの春の哉留めたるを時にかへびを
る下り留めをも跡くふく

連歌めを桜は花をも跡る能はめくも
正しきさるら跡くふらゆららるるを
跡くもあはくもてゆららるるは
跡くもふららるるは跡くも徳田

あふの正花あふさるあふはよらるるを
跡くことあふさるいさ人や桜は花跡く
きく

戀句の夏

恋の口
恋あふさるかきさるいさる男 荷分

縁さるる計の眼みさる 翁

又

大鏡ふらふらふらとぬき道と 半残

能く流紙のとまふたのさ 土芳

善竹集

中

本

中

又

あつちり

うそまの干菜きらむらのを 野坡

るし出ぬ日以内て急なる 翁

又

あつ野

きぬくやあるかおそくひてすふ 翁

風ひきたるよすのうは道 越人

又

あつ野

顔ぬとくはよ梓や居る 雨桐

黒髪をよめぬる種切ぬ 荷兮

あつ野の歌よそあつ

一白の情二白のる乃情をのそ急しとる
初めを推するこゆよ女婚なと出てもあ
伴ふよりのそ急るしと急を急のるの
あつ野の歌よ

補 句かゝの事

何者の急まちじらる道の原

あつ野の急まちじらる道の原
あつ野の急まちじらる道の原
あつ野の急まちじらる道の原

古人の名よあるへうまかむ掛さるハ
きりぬきもな〜とあへ〜

早し女の唇をぬあ〜〜後釋

口よりさ〜ぬ人の生の中

是ハ京都めて甚流と唱ふるその
集中よりありきりの白り出〜とら
さ〜ぬ〜と〜あ〜なる〜なり
親と兄弟君臣の間あ〜とら〜ぬ
〜あ〜りの旦風流〜とら〜る〜
もた〜

赤川集

掛乞よ急のら〜をのいせさ 公羽

かくい〜ん〜急の情も風流もあり

す〜と〜も〜の〜く〜く〜
〜〜と〜氷清玉流〜
急のら〜あ〜と〜ゆ〜ゆ〜
を急のら〜ゆ〜ゆ〜
流二るの房の風情をゆ〜ゆ〜

行水の時面目をけしぬいと

ふあ等う〜ぬハ急もはるあ

こ〜と〜の〜ゆ〜ゆ〜
流のせ〜る〜ゆ〜ゆ〜
間なり〜時〜流〜ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
出〜急〜ゆ〜ゆ〜
甚急の忠〜ゆ〜ゆ〜

百姓寺人御母の教

あしりゆるゆきみけく世也百姓寺作
寺こしつうし中しこしこしあひあひ
福元福の徳風をさる

ゆき教かる世にさる寺なれや

ゆるあひく世の金

さあつよおつこつとる意をして

百姓寺の御母の教

とそ角の所とさふ人由縁しそ
無由階故さのさふみゆとささるよ
そのち作かまの上おあを同さる

さあつよおつこつとる意をして

うき世の果は ね小町也

と所とささるか一縁を各人の白作安
らうふらふさうて縁縁と其角の
非を悔ひらぬと白雄を話ふらと
アめ

藤白二句のる ね座の事

あひあひの町はさもゆあ果

ひく声もささるね松急奏

是年そのを婿うらつとさよねあそ

一白たゞも目をもて町のあはれくさるゝ
又た時をいつら、一かあり

雨の音も静かにはくふくおち也

真一もふかしくも掬の山使

こころさしつとあはれも一静かあるが借
ふもそのゆくまゝ人いふあはれさるる目のなる由
しあはれさるるまゝとあはれさるるまゝ
古人曰静かるとは流川をさるるまゝと故
ふかしくさるるまゝとさるるまゝと一白、風暗を
静か

坊主の連は油で風ひく

こころさるるの静かまゝ

静か

静かりの田の青中さしてつとまゝの
凡兆

かゝの静かるとまゝの社もまゝ
公翁

白集

火ののろまゝのあはれ山平の寺
去来

ほととぎす皆鳴りけりまゝ
公翁

こころさるるまゝとあはれさるるまゝ

静か静か静かのあはれまゝ

まはれ

静かの門も静か静か静かの
曾良

静か静か静か

まじりて

中

かき消るる夢の野中の地花堂 露丸
妻あゝとれを山犬の色 公羽

續より一葉

谷かき消るる松の扉をたぬく 其角
る故をそらゆるひらの偷り
顔あやしく都の友の車りうを 敏足

韻塞

いふやうな意もまろへるる 武水
花色をかへて出る紫物 翁

晨明子昆河門出の小方丈 訶六

美の意

ひらきぬる死をたてて 彫棠
帳やうらさほも針よたふき
ありぬもすくぬふ 横几
公羽

其意

空の外鏡をたてて 露沾
履きぬるもぬるる 沾荷
八月の月影をたてて 公翁
武者一人

まじりて

中

六

山崎 一 山崎 一

去の日

身をなまめく一交の骨をばと世ふ 荷分

似体乳をかきひらき 昌桂

雪を拂ふ鏡よ人老影う山草 雨相

保川集

都をさる去来の行跡よ思ひわく 利合

呪ふより肉より釋迦堂の暮 酒堂

嘆そめを忍ぶ人後ゆさねと人妻 公福

とらふ山

氣身と習方の世をばらさる 支考

海唇の里をゆしてふささる 女草

喰らひぬおののまのしと人 公翁

この日

世をなまめく一交の骨をばと世ふ 其角

乳人用まの骨をとりおを 我牽

志やふ其まのらのも綸ふめて 嵐雪

つらむい

涙かきと圍れぬ数 其角

山崎 一 山崎 一

古今和歌集 中

娘もあつていふ多のつらさを
小原まよふの能をよそへり
其角 嵐雪

小文彦
佛のふ地を包むるあまを
翁

ふらふらと白挽出でるほろもき
おころりそそののゆるる竹根
山店 翁

とよみと歌
鳥のうたの浦のほろもきの
北枝

籬へと降りてそとく月のをき
木槿をほろえて皆をるゆり
牧童 北枝

とよみと歌
若くは泣き美女無衣はな投る
其角

かひくをくを柳のしじ
世の縁と道世みのいさめを
松濤 卷白

後日記
志をくくし誘ふるも眉のまは
杏雨

結縁縁のうらをゆるすまは
あそびとらふ言のほの時鳥
杏農 落梧

古今和歌集 中

こころ

半菰のやうに咲く花を今 助叟

莖靴の火のぬるた如月 園女

まのよの草履つゝいよ飛越て 山人

あきのら

秋の旅の途連歌いとかさふ 翁

あゝかゝ暗て留士えゆる寺 荷兮

寂とて棟のたの落るる音 杜國

あきのら

顔よりのあつてうゝ舞の息 具角

鈴繩糸舳のさそふいびく舟 弘居

層のをとゞゝれ後あうあゝ 其氣

あきのら

垣穂のほゝきあはれいふりきと 翁

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 越人

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 翁

あきのら

弥勤の堂小思ひうちゆ 枳風

待宵の清らき露のそよそのの中

翁

なごの鏡のそよそのの色

山化

狂尾集

清楽ハ生るるあふかりをい

曾良

小袖そよをさるる戒の師

不玉

つら顔の母よ似るもねしそ

翁

續るる

禪寺ふ一日あそふ砂のう

里圃

櫛の角のそよぬ貫穴

馬寛

濱山の牛よ信をそよよ也

翁

世江集

人ひそかきそよのそよこれ

曾良

松拍そよ嵐のねとそよの

石雲

そよ射そよそよ猪の皮

翁

相馬山集

圓海そよそよあの日月

露丸

つら顔そよそよかきたるおよのそ

重行

鏡を小帳とけき

翁

ひんこ
はるのうたのうたかたのうたのうたのうた

珍碩

親みたりして月よりのうた

秋の宮中のうたのうたのうたのうた

路通

大伴の巻

橘のうたのうたのうたのうた

松洞

うらまゝの女よ訓て日をばりま

奇香

矢負のうたのうたのうたのうた

翁

いんのか

あはれなうたのうたのうたのうた

猿雖

雪舞の中ををりてうたのうた

雪芝

志あせせしうたのうたのうたのうた

翁

宇陀法師

於るうたのうたのうたのうた

李由

た邊のうたのうたのうたのうた

許六

うたのうたのうたのうたのうた

汶村

いんのか

里人ふたうたのうたのうたのうた

越人

月よりのうたのうたのうたのうた

羽立

いんのか

中

三

ころひきる木の根よ花の軒とえ 野水

顔寒

うらぶる白濁の花の木かきと 岱水

はらわりのとふ輪の卯とる 翁

まづ病く隠者の宿をかんじと 許六

子ら寒

絡より成欄乃柱を節とく 翁

いづれいぢを志すかんじし 露沾

志をなすかたに記念の敷きもよと 沾荷

云の目

隠ひをくせふまの温泉の山 翁

のくまや筑紫の杖伊勢の帯 越人

内侍の携む代々の履の圖 荷兮

あゝ丹

本堂いすくあゝ壁のけしと建 正秀

四階後の杖をきり給ひぬ 珍碩

歯をいすむ人の姿を給ひぬ 正秀

三十一

中

三十一

若し

写子みくろく行教の志

釣雪

盗人亦ほきそく妹の血を流す

翁

新子のけきぬ園くの井

曾良

あし

木狭るぬる形し松の枝

長缸

秤りかぬ人くぬ奥

故及

世年よなるて各々の銘もあき

一井

と旅百

後任女まぬくうちく

其角

山より乳を呑む猿の声出

工齋

命を甲斐の掬ともえよ

枳風

る

下るぬむらうをうらほし解

其角

よきよのやぬ江の海をえぬして

溪石

よる中なる中侍の麻衣

琴風

歌集

るうさぬきて世屋をくらふ

李由

いさをす堰の食屋をそむむ

木導

中

中

三十一

早更のうらむ花招の風 朱迪

らるる

又逢をゆらひは歌しをら秋 翁

午向よあらひるる神おし 去来

ゆくゆく世蓋のひそぬ半柱 允兆

きの日

血うられふくく月のうらきふ 荷分

空のりて本郷の鐘しらきく 杜國

みまの納まぢをぢく 野水

らるる

麻耶の高招よはりのかきさ 野水

夕えしふかゆさふ吟の風甚る 允兆

軽の口ふよをかきてま味よれ 翁

らるる

的場のま勝よ咲れ山吹 釣電

春を海し七らの年入力石 翁

汲ていそくく醒る井の水 露丸

中

中

中

澄みわたる

月影を礎の柱のはえうも

嵐雪

くも風もく寐えあはし

虚公

傾城のさひしう方教あそぬ也

其角

うらみの

渡舟のすこ起ゆるちうくねき

史邦

陣ちこころとて車引ざむ

元兆

うた人を招穀垣よりうらせえ

翁

あきの日

令婦の君の来りんとさそ

重五

紅餅手付津浪のあよらんぬゆ

荷兮

佛らのあまゆる魚あそきさうり

翁

あつこ三つは

補

三葉表にふるおまへは

工山

あまあて衣の破を綴りあれ

桐葉

秋の鳥の人喰らゆく

翁

巴うえ

安しこま剛の海京をす後

翁

夕なすのねもつらのこころ

半残

あつこ三つは

中

五

手枕より男ものへ借るるに細 土芳

浮城の巻

鳥の巢をくちくはあつと尾 翁

二月もあがり甲おもきとて 業夕

阿しよ光ふ方のゆき 曾良

水原の巻

名ふおのたつふ山々の岩俵 翅輪

捲衣うきよく尼達の家 曾良

阿の月も急いふし冬かきくは 翠桃

木下巻

高田の雪集てもむうし色 其角

白なまふ園の静おぬねを飛し 嵐雪

きしーたつき風の石葛も来れ 翁

郵懐紙

空を待つる雪よせつらるる秋 杉風

来庭を新ふかきくる秋の空 濁子

塵さうちを落つる器の冷摘 涼葉

山中の巻

あゝと降たりの山の麓の寺
遊女にも人回舎わさへい
あゝと降たりの山君の名もあつて

北枝
曾良
翁

あゝと降たりの山

鶯の尾を松葉の園子掛らぬ
風を身をさへくきあそ付死
華とやそ木の蔭を歩たれぬ

叩端
相葉
叩端

別を著る

山のかつある下市の里

子珊

その山のけしきと松の気はうら

杉風

ゆり乃月もすこゝろ影

桃隣

浪の指お

何のうらさふ形を蠅の糞

瓢界

おそ路一やいけの年のあ覚

立志

あゝと降たりの山又あつてあそ

野童

あゝと降たりの山

松おこをさるる田の中の小田

塔山

あゝと降たりの山あつてあそ

路通

「らうそもの思ひ浮世 人 翁

徳田之丞

鳥羽玉の切女 翁 叩端

冬もあつた 翁

秋も程多味ふもの 翁 桐葉

徳田之丞

流く酒天口 翁 公羽

とくくと 翁 野坡

稲盗人の縄 翁 公羽

徳田之丞

花弱の色 翁 沾蓬

ぬあゆす 翁 曾良

ふる程の子供 翁 翁

徳田之丞

たま鳥の火 翁 越人

瓦庇よ 翁 杉風

ふきを 翁 苔翠

栗のあまけ

纏の仕出の流竹常棣

酒堂

月影もさく海老のあつちよ

詠竹

杖一本を道の程迄

何中

とくふ山家

やもよとよとよね逢坂の松

公羽

農明の志を隔て馬と駕

卓袋

冬終志をきりり既痛かきき

木節

ひらの山家

捨ふのねよ戒律の尼

調和

羽志ぬ年木の紫の禪の売

立志

風阿そい日阿阿そそ降

直方

山川集

あふ海の人魚魚も也

翁

る乞の志をみくうり海出そ

大州

紡草をこころ指管の蓋

惟然

素木の巻

海簾の糸角よ志ふさふい

大州

歌の声く鳴りてあつちよ

路通

燈の中人おろす早桶翁

こころを落して俗よりさうさうの
雑俗よあそぶあそぶ

縣向自他の事

硯をむくひききれ捲け 自

初めの花吹雪さうひさる夕少ふ 時節

新雪ふれ終る女印群 他

け外踏うことなり

むらじ火よ尺ら流也かふるらむ 他

松風落く氷の切と糸 其場

さうとさうと群のさあさう明屋あ 自

け外踏うことなり

並木の暮のせらくと落 時節

巡礼の子を抱き朝の月 他

飯新目もゆきよ飯冷いきあひ 他の向踏

ひのきくさし紅赤うさのあ 他の巡礼の
あむらひ

そのく衣もむらの名残と 自あそびの
あむらひ

け外踏うことなり

と浴瓦あはし、松よ志はすまゝ、 其場

比留くまのきさる、ゆゑこの後、 自

肴痛の粥ふきゆま、小くかき、 他自よりよひ

さるりのいふさるのもさむ秋ちさ、 自自のるふ

いふさるの介階さなり、 附さ、そ
人の自の
自より
介階し

花よりけいさゆめていて糝ゆい、 他

志るる居りまゝ人はちひさ、 他の向い階

後や先裾よむろの下向ら、 他の居の

深衣を思ひのすふ委はけし、 自他の居へ
向ひさるこ

いふさるの介階さなり

茶よなるいひはきはき形、 自

人をもひら侍田中の法垣守、 他自よりよひ
出さるこ

ふちぬ松葉をよゆささむる、 他少むさひ
あはらひ

ふろくみちる屋根葺の塵、 他の向い階

いふさるの外階さなり

鯨窓一二の讀、こりくさへさ、 他

サカふあたる、新よそさる、 他縁つきの
あはらひ

新くも我も深世ぬあのもく、 自他のあはらひ
むさるこ

いふさるの介階さなり

あはれきそ其難は積の何なるあり 自

いづちありその活外の春 自

又よほしは操りりよの女産を連 他 自よりよ

いふ所をさし

巻くくふ骨もむよふ未ら 他

くき世の中もたのりた哉 自 他へい

西国をくく都も旅あをきや 自

藤白を自他のくくち肝要たりとくこの
轉しを思ふへいけい自路をさし
いづち自他のくくちありて人情あり

踏くさなりしりあも也人情うちつさる

ときい 其場を其場のあらし 時長

時分 天相 け五ツとつをさうしも踏

人懐たふるさるけいあ

人情のるを人情をさるあをささむ

いしこいよのさるの轉さるいふあり

人情ある二るはあをさうんあをのじ

るいさい出てもいさか

まんといあをのさしるあをのけい

ると思ふいあし 其場を其場のあらし

時長 時分 天相と思ふあり

其場 梳ゆあをを門の馬はたれ

補 ちけらふりえをかえる川筋

いふ所をさし

いふ所をさし

三の巻を
井

はるるかりるから後河川

くく踊るもわらあるも自のるふたも地
是所るをのそふるの自地をさるは法こ

祖翁曰縣るのる中念入るるへかこ
別之るの轉しこ

古人曰縣るのる中念入るるへかこ
是中こ之るの轉しこ

鳥酔曰縣るは有用ありそ有用あり
考て有用の所をみりよへしこ是を

之るの轉しこ
白雄曰巻中のるくよく味のそ惹門
縣るのる味を考るる

俳諧寂琴卷之中終

